

未来の姿を共にデザインする場に 自律協生スタジオがなるといい



interview

谷崎勝教

株式会社日本総合研究所
代表取締役社長 兼 最高執行役員

代表取締役社長兼最高執行役員として、コンヴィヴィの開設を
発案・主導した谷崎勝教さんに、シンクタンク／コンサルティング
ファームである日本総研が美大と協働する背景などを伺いました。
三井住友フィナンシャルグループのグループCDIO（チーフ・デジ
タル・イノベーション・オフィサー）を務めた経験もある谷崎社長か
らは、イノベーションを巡る興味深いお話が聞けました。

言っているだけ、書いているだけでは伝わらない

——「自律協生スタジオ」を開設して1年半が過ぎました。なぜシンクタンク／コンサルティングファームが美術大学と協働するのか、改めてその狙いを教えて下さい。

日本総研はシンクタンクとしてレポートを書き、有識者を輩出して、政府の会合などでも提言を行ってきましたが、本当にこの国を変えることに貢献できてきたのかという反省があります。何が正しいのかもわからなくなるほど情報が氾濫する中で、言っているだけ、書いているだけでなく、もっと目に見える形で共有していかないと伝わらないし、世の中を動かすことはできないのではないか。そういう問題意識から、アートやデザインの、見えないものを可視化する力に関心を持つようになりました。ちょうどその頃に、武蔵野美術大学と出会って、美大とつながれば、社会的に意味あることができるのではないかと考えるようになったのです。

——コンサルティングファームとしての日本総研から見て、ビジネスシーンで求められる美大や美大出身者の力は何かとお考えですか。

これまでの企業活動は過去からの延長線上で経営を考えることがほとんどでした。しかし、これからは10年後に社会がどう変わるか、消費者がどう変わるか、個人に対するサービスがどう変わるかという視点で未来をデザインしていく能力が必要になります。その時に重要なのが、“新たな問い”を立てる力です。アートの世界では「何のために、何をつくるのか」という問いを見出すところからスタートしますよね。この“問う力”が、これからはビジネスシーンでも大変に重要になっていくはずですよ。新しい製品やサービスをゼロベースで考えたり、今までの常識を疑ったりができるセンスと言い替えることもできるでしょう。美大ではゼロからものごとを考え、制作するトレーニングを重ねるからこそ、そういったセンスが身につくのではないのでしょうか。三井住友銀行でスマートフォンのアプリを刷新したときに、そのことを実感しました。美大出身のデザイナー達が、画面の見やすさやユーザーの心に訴えるあり方など、私達銀行員とは全く違う発想でアイデアを次々と出してくれたのです。やはり、問う力を鍛えるトレーニングを大学生のうちから続けないとこうはならないと痛感しました。

“問う力”と“レジリエンス力”がイノベーションを実現する

——確かに、美大では、答えを出すこと以前に、問いを立てることが重視されますね。

問う力と共に、いままでに誰もやったことがないことにチャレンジする能力も美大出身者の魅力のひとつです。そして、それを支えているのが、レジリエンス力、すなわち「逆境や困難をしなやかに乗り越え、回復する力」だと思います。美大で学んでいると「つくりたいものが見つからない」「自分よりもすごいものをつくる人が身近にいる」「自分には才能がない」など、心が折れそうになる瞬間が何度もあると思います。それでもつくり続けるには、相当のパワーが必要ですよ。そういう中でレジリエンス力が自然と

身につくのではないのでしょうか。ムサビの学生を見ると、そういった美大ならではの“個の力”を感じます。イノベーション人材とは「テクノロジーがわかる人」や「プログラムが書ける人」ではなく、失敗しても歩みを止めずにプロジェクト遂行のために挑戦し続けるレジリエンス力を持った人です。“問う力”と“レジリエンス力”は、イノベーションを実現するために不可欠な力だと思いますね。

自律協生社会の実現に向けて

——自律協生社会の実現に向けて、美大はどのように貢献できそうですか？

自律協生社会とは、自ら律する、つまり、自らアジェンダセッティングし、問いを立て、自分なりの解を生み出せるような個人がベースとなる社会です。そういう個、多様性のある個の集合体に企業や行政がなっていくと、これからは生き残っていきません。何も強い個じゃないと生き残れないと言っているわけではありません。ただ、あまりにも今の日本社会は個が置き去りになっているので、もっと個の主体性が発揮されないといけないと思います。組織の論理の前に自分を押し殺し、或いは思考停止してもたれ合うのではなく、主体的に生きる。そうじゃないと楽しくないです。その人の本領も発揮されない。そのためにも自らの置かれた状況を問い直す。問うことから自律は始まるんです。

自律し、個が立とうとすれば、当然、他者とぶつかります。ぶつかるから、どうしたいか、どうあるべきかを話し合う。諦めずに何度も話し合っていれば、仲間になり、協力できる関係になる。それが協生です。美大が培ってきた問う力とレジリエンス力は、自律協生社会を実現する上でも不可欠になると思います。

可視化する力も重要です。妄想がイメージとして見える化されることで、こんなことができるんだと自信が生まれ、できることはたくさんあるんだと気づく。そうなれば人は変わることができます。一つの地域や組織で生まれた小さな成功例でも、それが見える化されることで、ロールモデルになり、まわりも変わっていく。小さな成功例が互いにつながり、さらに大きなうねりになっていくのが自律協生社会です。

——最後に企業へのメッセージをお願いします。

企業も自分達の未来のイメージを持つべきですよ。短期的な成果ばかりに血道をあげるのではなく、自分達の企業が社会にどういう形で貢献できるのか。何をつくれれば社会がウェルビーイングを享受できるようになるのか。それをイメージできるようにすることが、社員のモチベーションという意味でも重要になっています。企業の目指しているものをはっきりさせることができれば、経済性ばかりが追求される空気も変えていける気がするんです。今こそ、企業自身の未来をデザインする力が問われているんだと思います。自律協生スタジオは、色々な企業とこれからの社会のあり方を議論し、共に未来をデザインする、オープンな共創の場になったらいいなと考えています。是非、仲間になって下さい。

聞き手 | 武蔵野美術大学 ソーシャルクリエイティブ研究所 増田悠紀子